

総合評価

1) 危険有害性の要約

本物質は、経口投与で速やかに吸収され、肝臓に主に分布し、糞中に排泄される。本物質のヒトでの急性及び慢性影響は報告されていない。実験動物では、感作性及び皮膚や眼に対する刺激性が報告されている。また、反復投与毒性試験においては、肝臓への影響が認められている。変異原性・遺伝毒性では、マウスリンフォーマ試験及び形質転換試験で陽性の報告がみられている。発がん性については、ヒトでの報告はないが、ラットまたはマウスの発がん試験において肝細胞腺腫/癌、肺の細気管支/肺胞上皮腺腫/癌、甲状腺の濾胞細胞腺腫、膵臓の腺房細胞腺腫がみられていることから、IARC ではヒトに対しても発がん性を示す可能性があるとしてグループ 2B に分類している。生殖・発生毒性については、実験動物で胎児毒性がみられているが、催奇形性はみられていない。

本物質は環境中に放出された場合、水圏では生分解されにくい、生物への濃縮性は低い。水圏環境生物に対する急性毒性は、甲殻類及び魚類で弱いと考えられる。

2) 指摘事項

- (1) 実験動物において感作性及び皮膚や眼に対する刺激性を示す。
- (2) 実験動物の反復投与毒性試験において肝臓への影響がみられている。
- (3) 実験動物の発がん性試験において肝臓、肺、膵臓、甲状腺等で腺腫または癌がみられている。
- (4) 化審法の指定化学物質及び化学物質管理促進法の第一種指定化学物質に指定されており、環境モニタリングを継続すると共にリスク管理をより一層徹底する必要がある。

参考資料

- 1) (社) 日本化学工業協会調査資料(2000).
- 2) 通産省化学品安全課監修, 化学品検査協会編, 化審法の既存化学物質安全性点検データ集, 日本化学物質安全・情報センター(1992).
- 3) Sharat Gangolli, The Dictionary of Substances and their Effects, 2nd. Ed., The Royal Society of Chemistry(1999).
- 4) KowWin, Syracuse Research Corporation.
- 5) NIST Library of 54K Compounds.